

2.4 [木]	第589回 サントリーホール名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 The 589th Suntory Hall Popular Series Thursday, 4th February, 19:00 / Suntory Hall
2.5 [金]	第21回 読響メトロポリタン・シリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／19時開演 The 21st Yomikyo Metropolitan Series Friday, 5th February, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
2.6 [土]	第85回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 The 85th Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series Saturday, 6th February, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.4

ピアノ／辻井伸行 Piano NOBUYUKI TSUJII P.5

コンサートマスター／日下紗矢子 Concertmaster SAYAKO KUSAKA

デュティユー 音色、空間、運動 [約15分] P.6
DUTILLEUX / Timbres, espace, mouvementベートーヴェン ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15 [約36分] P.7
BEETHOVEN / Piano Concerto No. 1 in C major, op. 15

- I. Allegro con brio
- II. Largo
- III. Rondo. Allegro

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第6番 ヘ長調 作品68 〈田園〉 [約39分] P.8
BEETHOVEN / Symphony No. 6 in F major, op. 68 "Pastorale"

- I. 田舎に到着した時の嬉しい感情の目覚め
- II. 小川のほとりの情景
- III. 田舎の人々の楽しい集い
- IV. 雷雨・嵐
- V. 牧人の歌～嵐のあとの喜びと感謝の気持ち

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
 [事業提携] 東京芸術劇場（2/5）
 [協力] 横浜みなとみらいホール（2/6）
 〈サントリーホール30周年記念参加公演〉（2/4）



2.12 [金]	第555回 定期演奏会 サントリーホール／19時開演 The 555th Subscription Concert Friday, 12th February, 19:00 / Suntory Hall
2.14 [日]	第184回 東京芸術劇場マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 The 184th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series Sunday, 14th February, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

Principal Conductor SYLVAIN CAMBRELING P.4

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

モーツァルト セレナード 第13番 ト長調 K.525
〈アイネ・クライネ・ナハトムジーク〉 [約16分] P.9
MOZART / Serenade No. 13 in G major, K. 525 "Eine kleine Nachtmusik"

- I. Allegro
- II. Romanze. Andante
- III. Menuetto. Allegretto
- IV. Rondo. Allegro

[休憩 Intermission]

マーラー 交響曲 第7番 ホ短調 〈夜の歌〉 [約77分] P.10
MAHLER / Symphony No. 7 in E minor, "Lied der Nacht"

- I. Langsam (Adagio) – Allegro risoluto, ma non troppo
- II. Nachtmusik I. Allegro moderato
- III. Scherzo. Schattenhaft
- IV. Nachtmusik II. Andante amoroso
- V. Rondo – Finale. Allegro ordinario

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
 [協賛] NTTコミュニケーションズ株式会社（2/12）
 [助成] 文部科学省文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）
 [協力] アフラック（アメリカンファミリー生命保険会社）（2/12）
 [事業提携] 東京芸術劇場（2/14）
 〈サントリーホール30周年記念参加公演〉（2/12）



シルヴァン・カンブルラン

(常任指揮者)
Sylvain Cambreling

ベートーヴェンとマーラー
二つの大曲を披露
辻井との初共演にも注目

幅広いレパートリーと躍動感あふれる緻密な演奏で高い評価を得ている読響常任指揮者。今回は交響曲史上に名を残す二つの大曲、ベートーヴェンの第6番〈田園〉とマーラーの第7番〈夜の歌〉を披露する。また、20世紀フランスの代表的な作曲家デュティユーの作品や辻井伸行との初共演にも注目したい。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン&フライブルクSWR(南西ドイツ放送)響の首席指揮者を歴任し、現在はシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督とクラゲフォーラム・ウィーン的首席客演指揮者を兼任する。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マイนツのヨハネス・ゲーテンベルク大学



©読響

で指揮科の招^{しょうへい}聘教授も務めている。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルを始めとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

録音にも積極的で、読響とは《幻想交響曲ほか》《ペトルーシュカほか》《第九》《春の祭典／中国の不思議な役人》《スコットランドほか》をリリースしている。

- ◇2月4日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇2月5日 読響メトロポリタン・シリーズ
- ◇2月6日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
- ◇2月12日 定期演奏会
- ◇2月14日 東京芸術劇場マチネシリーズ

辻井伸行

Piano Nobuyuki Tsujii

カンブルランと初共演
若き楽聖の力作に挑む
ヴァン・クライバーンの覇者

世界のひのき舞台上で活躍する日本を代表する若手ピアニスト。2009年にアメリカのヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクールで、ハオチェン・チャン(中国)と共に1位の栄冠に輝いた。日本人としては初の快挙で、その時のベートーヴェンのピアノ・ソナタ第29番〈ハンマークラヴィーア〉の鮮烈な演奏は、今も語り草となっている。若きベートーヴェンの力作であるピアノ協奏曲第1番でも、はつらつとした音楽を聴かせてくれるだろう。

1988年東京生まれ。98年にプロ・オーケストラと初めて共演し、2000年に初のソロ・リサイタルを開いた。05年のショパン国際ピアノ・コンクールでポーランド批評家賞を受賞。アシュケナージ指揮フィルハーモニア管やゲルギエフ指揮マリインスキー劇場管などとたびたび共演し、アメリカのカーネギーホールな



©Yuji Hori

ど世界の一流ホールでリサイタルを開いている。

日本でも読響をはじめとする多くのオーケストラとの共演やリサイタルを重ねている。15年はヴァシリー・ペトレンコ指揮ロイヤル・リヴァプール・フィルおよびゲルギエフ指揮ミュンヘン・フィルと国内ツアーを行い、好評を博した。録音もエイベックスから多数出ており、近年では《ショパン：ピアノ・ソナタ第2番、第3番》《ラ・カンパネラ〜ヴィルトゥオーゾ・リスト!》などがある。

- ◇2月4日 サントリーホール名曲シリーズ
- ◇2月5日 読響メトロポリタン・シリーズ
- ◇2月6日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

デュティユー 音色、空間、運動

作曲：1976～78年／初演：1978年、ワシントン／演奏時間：約15分

ゴッホの『星月夜』に触発されて

現代フランスを代表する作曲家、アンリ・デュティユー（1916～2013）は今年で生誕100年を迎える。

〈音色、空間、運動〉は、ロストロポーヴィチがナショナル交響楽団の音楽監督に就任するにあたり、彼がみずからデュティユーに委嘱した作品。「星雲」と「星座」の二つの部分からなり、1978年1月に完成をみたのち、さらに1990年に改訂が施された。

この作品は、サブ・タイトルにもなっている画家ゴッホの『星月夜』（15頁参照）に強いインスピレーションを得ており、それをデュティユーは楽器編成と配置に反映させた。指揮者の前方に、半円を描くように12挺のチェロを

置き、背後に木管楽器、さらにそのうしろに金管楽器を、そして左手に打楽器、右手にコントラバスを置き、ヴァイオリンとヴィオラを欠く編成をとる。

デュティユーは、ゴッホの絵画の配色に即して、楽器ごとに異なる音をあてがうことで「音の色」を表現している。また、楽器の配置やオーケストレーションによって「空間」を、そして「運動」でははげしい音の動きが絵画における渦巻くような情景を表す。この作品は、音色を重視する彼の創作のなかでも、とりわけ音響の構成と絵画的な空間の表現に特徴がある。ゴッホの絵に描かれた神秘的で内面から湧き上がるような渦が、音色や音の運動によって映し出されている。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替、アルトフルート持替）、オーボエ3、オーボエ・ダモーレ、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、クロテイル、小太鼓、大太鼓、マリimba、サスペンデッド・シンバル、銅鑼、ボンゴ、トムトム）、ハープ、チェレスタ、チェロ、コントラバス

ベートーヴェン ピアノ協奏曲 第1番 ハ長調 作品15

作曲：1793～95年、1800年改訂／初演：1795年12月18日、ウィーン／演奏時間：約36分

革新的な試み随所に

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は、5曲のピアノ協奏曲を書き上げた。第1番はウィーンに定住し、ハイドンやアルブレヒツベルガーらの指導を受けたのちに作曲された。創作に着手したのは1793年で、95年3月には初稿が完成し、その年のうちにブルク劇場でベートーヴェンがピアノを担当して初演を行う。その後、彼は推敲を重ね、最終稿を完成させたのは1800年4月以降である。

ベートーヴェンは1801年4月22日に出版社ブライトコップフ・ウント・ヘルテルに手紙を宛て、第1番の協奏曲について「それは最良の自分の作品ではないのですが……」としたためた。このような逆説的な語り口には、この作品の革新的な試みが込められている。このピアノ協奏曲は、基本的にウィーンの伝統的な作曲法に基づきつつ、大胆な和声や転調も取り入れた意欲的な作品である。1804年の「音楽総合新聞」は「奇怪なまでに半音階的進行や異名同音転換で飾り立てたベートーヴェンの新たな協奏曲」と述べ、第1楽章に

ついては「転調があまりにもかけ離れていた」と評している。当時のウィーンの人々には、この作品はアヴァンギャルドな作品と映ったのである。その点で、モーツァルトの作曲スタイルを模範とした第2番とは対照的である。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ ハ長調。第1ヴァイオリンが弱奏で表す第1主題は、オクターヴの跳躍と上行音階を含む。対照的に変ホ長調の第2主題には、第1ヴァイオリンの緩やかな下行音階や半音階が取り入れられている。コーダについては、ベートーヴェン自身が三つの稿を残した。

第2楽章 ラルゴ 変イ長調。楽章を通して、ピアノとオーケストラの応答が顕著である。この協奏曲の主調（ハ長調）に対して、第2楽章は長3度下の変イ長調であり、この時代にしては珍しい。

第3楽章 ロンド、アレグロ ハ長調。冒頭からピアノがロンド主題を提示する。第1クプレ（中間主題）ではト長調、そして第2クプレではイ短調へと転じる。

楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン 交響曲 第6番 へ長調 作品68 〈田園〉

作曲：1807～08年／初演：1808年12月22日、ウィーン／演奏時間：約39分

ロマン派標題音楽の先駆け

1802年のいわゆる「ハイリゲンシュタットの遺書」のあと、ベートーヴェンは中期様式の傑作を生み出してゆく。交響曲第6番は1807年から08年に作曲され、1808年12月22日にアン・デア・ウィーン劇場で初演された。当日はこの交響曲の他に、交響曲第5番〈運命〉や合唱幻想曲も初演されるなど、音楽史上、注目すべき演奏会であった。

交響曲第6番は、ベートーヴェンの9曲の交響曲のなかで唯一、5楽章構成である。自筆譜にはこの交響曲のタイトルとして「田園交響曲、あるいは田舎の生活の思い出」と記され、さらに「絵画と言うよりも、むしろ感情の表現」と綴られている。また、各楽章の標題は作曲家自身によるもので、ロマン派における標題交響曲の先駆けとして大きな影響力をもった。

第1楽章 “田舎に到着した時の優しい感情の目覚め” アレグロ・マ・ノン・トロppo へ長調。ハーディ・ガーティ（民俗楽器）の響きを連想させる空虚5度をヴィオラとチェロが織りなすなか、第1ヴァイオリンは第1主

題を柔和に歌い上げる。ソナタ形式に基づいており、ゆるやかな起伏の第2主題を第1ヴァイオリンが奏でてゆく。

第2楽章 “小川のほとりの情景” アンダンテ・モルト・モッソ 変ロ長調。この楽章も、ソナタ形式で書かれている。また、音楽の自然描写の点で注目される。コーダでは、フルート（ナイチンゲール）、オーボエ（ウズラ）、クラリネット（かっこう）が鳥の鳴き声を模している。

第3楽章 “田舎の人々の楽しい集い” アレグロ へ長調。弦楽器が弱奏で主題を朗らかに表し、そこから導かれるように二長調の大らかな旋律が現れる。トリオはトランペットも加わる。

第4楽章 “雷雨・嵐” アレグロ へ短調。ティンパニとピッコロを加え、激しい嵐の様子を描き出す。

第5楽章 “牧人の歌～嵐のあとの喜びと感謝の気持ち” アレグレット へ長調。空虚5度の響きのなかで牧歌的な旋律が奏でられたのち、第1ヴァイオリンは息の長い第1主題を歌い上げる。感謝と喜びに満ちたフィナーレ。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦五部

2.12 [金]

2.14 [日]

柴辻純子（しばつじ じゅんこ）・音楽評論家

モーツァルト セレナード 第13番 ト長調 K.525 〈アイネ・クライネ・ナハトムジーク〉

作曲：1787年8月10日完成／初演：不明／演奏時間：約16分

未解明の謎も多い名曲

〈アイネ・クライネ・ナハトムジーク〉は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）の作品のなかで最も有名な曲であろう。簡潔で親しみやすく、生き生きとした旋律や急激な暗転による表情の変化など、その魅力は音楽の至るところに溢れている。

しかしながら誰もが知る名曲にもかかわらず、作曲の目的や初演など、未だ解明されていない謎は少なくない。

1787年は、歌劇〈ドン・ジョヴァンニ〉の作曲に追われ、この曲はその合間をぬって書かれた。〈アイネ・クライネ・ナハトムジーク（小夜曲）〉のタイトルは、モーツァルトが1784年から自身で記入を始めた『全自作品目録』に由来する。これまで一般に「セレナード（夕べの曲）」と呼ばれてきたが、この名称は、モーツァルト自身ではなく、作曲家の死後、楽譜出版社が付け

たものだ。さらに目録には、二つのメヌエットを含む5楽章構成と記されるが、自筆譜はそのひとつが取り除かれ（あるいは散逸）、それもモーツァルトの手によるかは謎のままである。最近の研究では、モーツァルトと親しかった高名な植物学者のために作曲されたという説が有力視されている。ではどのような機会に演奏されたのか、今後の検証が待たれるところだ。

第1楽章 アレグロ 有名な旋律がのびのびと歌われる。

第2楽章 ロマンツェ、アンダンテ 穏やかで美しい主部と短調の中間部が見事な対比をみせる。

第3楽章 メヌエット、アレグレット 力強いリズムのメヌエットと美しい中間部（トリオ）が交替する。

第4楽章 ロンド、アレグロ 快活なロンド主題が繰り返される。

楽器編成／弦五部

マーラー 交響曲 第7番 ホ短調 〈夜の歌〉

作曲：1904年～1905年／初演：1908年9月19日、プラハ／演奏時間：約77分

内面の広がりとお行を追求

モーツァルトは、自作を〈アイネ・クライネ・ナハトムジーク（小夜曲）〉と記して、緩徐楽章を二つのメヌエット（ひとつは失われた）ではさむ楽章構成で構想したが、グスタフ・マーラー（1860～1911）は、交響曲の中のスケルツォ楽章を二つの「ナハトムジーク（夜の歌）」で取り囲む、5楽章から成る交響曲第7番を完成させた。

1897年にウィーン宮廷歌劇場総監督に就任したマーラーは、指揮や劇場運営に関わる活動とともに、作曲家としても円熟を深め、創作活動の頂点を迎えた。特に19歳年下のアルマと結婚した1902年から1907年にウィーンを去るまでの5年間は、第5番から第8番までの4曲の巨大な交響曲を完成させたほか、〈大地の歌〉のスケッチを進め、〈亡き子をしのぶ歌〉を作曲するなど、驚異的な創作意欲を示した。

しかも多忙なマーラーが創作に専念できるのは、夏の休暇のわずか2か月の短い期間だけだった。夏が来ると待ちかねたようにオーストリア南部のヴェルター湖畔マイアーニツクの別荘に出かけ、その近くに建てた作曲小屋に

こもって新しい作品の構想を練った。そこではアルマがスケッチの清書を手伝うこともあり、彼女との幸福な生活の中でこれらの作品は生まれた。

マーラーの創作中期の三つの交響曲（第5、第6、第7番）は、いずれも声楽を含まない純器楽曲である。交響曲の伝統を踏まえた上で、内面の広がりとお行が追求された。第7番は、まず「夜の歌」と名づけた第2、第4楽章が、第6番完成前の1904年夏に書かれた。それ以外の楽章は、翌年の夏の休暇中に、後にマーラーがアルマに宛てた手紙で回想しているように、「湖でボートをひと漕ぎしたときに第1楽章導入部のテーマを思いつき」、残りの三つの楽章を4週間で作曲した。

マーラーはその後、ニューヨークに拠点を移したが、創作や自作の演奏のために新天地とヨーロッパを往復した。交響曲第7番は、1908年に作曲者自身の指揮によってプラハで初演された。しかし聴衆の理解は得られず、成功を収められなかった。それでもマーラーの生前、初演を含め13回演奏されている。1909年のウィーンでの演奏（指揮

は作曲者ではない）を聴いたシェーンベルクは、すぐさまマーラーに賛辞を贈った。かつてツェムリンスキーら若手の音楽家たちと、マーラーを名誉会長に「創造的音楽協会」を立ち上げ、新しい音楽を切り拓こうとした青年は、この交響曲に心酔した。「そこでは今までとは違った要素が作用しているように思います。印象が永続的なのです。私はいまや完全にあなたの虜です」

第1楽章 ゆっくりと（アダージョ）～アレグロ・リゾルト、マ・ノン・トロppo 長い序奏で始まる。ここには交響曲全体を支配する動機が含まれ、テナー・ホルンが序奏主題を力強く奏する。これは、プラスバンドでよく使われる特徴的な響きの楽器で、独特の雰囲気を作り上げる。ソナタ形式の主部では、ホルンとチェロによる勇壮な第1主題と弦楽器による穏やかな第2主題が展開される。展開部は主題が変化・発展するだけでなく、静と動の時間の交替を巧みに演出している。

第2楽章 “夜の歌” アレグロ・モデラート ロンド形式。角笛を思わせるホルンの呼び交わしで始まり、特徴的なリズムを背景にチェロで悠々とロンド主題が示される。時折、鳥の鳴き声やカウベルの音色、森の情景を思わせ

る楽想が現れる。さらにチェロがロマンティックに歌う主題やオーボエの哀愁を帯びた主題がはさまれる。

第3楽章 スケルツォ 影のように三つの主題をもつスケルツォ部分は、低弦楽器とティンパニが刻む不気味なリズムによって進められる。ニ短調の音楽で、まるで死の舞踏のようだ。トリオ部分（中間部）は、長調に転調してオーボエに導かれて穏やかな主題が歌われる。しかし、第1楽章の動機が現れると不気味な雰囲気に戻る。

第4楽章 “夜の歌” アンダンテ・アモロソ ヴァイオリン独奏の甘い旋律に導かれて、ホルンとヴァイオリンで主題が現れる。この楽章にはギターやマンドリンも用いられ、セレナード的な響きをも意図された。中間部は、ホルンを中心に幸せな時間が流れる。

第5楽章 ロンド＝フィナーレ、アレグロ・オルディナリオ ロンド形式。ティンパニが炸裂する序奏に続いて、ホルンとトランペットで第1楽章第1主題と関連のあるロンド主題が颯爽と示され、すぐにホルンと弦楽器によるロンド主題第2が壮大に現れる。この二つのロンド主題の反復に三つの新しい主題が加わり、鮮やかな変化を繰り返しながら力強く結ばれる。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、エスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、テナー・ホルン、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、銅鑼、小太鼓、トライアングル、シンバル、大太鼓、シンバル付大太鼓、タンブリン、鐘、ルーテ、カウベル）、ハープ2、ジュドゥ・タンブル、ギター、マンドリン、弦五部